

「こころはなまる」が問いかけるもの
一人で抱え込むことはないよ、
というメッセージを送り続けたい

特 性

【とくせい】そのものだけが有する、他と異なった特別の性質。特質。性格特性。

※広辞苑引用※

平成24年12月、文部科学省が行った調査結果が公表されました。

「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」です。全国600校、約5万3千人を対象としたこの調査結果は、全国の公立小中学校の通常学級の担任教員が回答した内容から、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示す、発達障害の可能性のあるとされた小中学生の割合が6.5%を占めるなどというものでした。

発達障害は、「ハンディ」ではなく、その人が生まれもった「特性」だといわれます。もちろん、病気でもありません。しかし、グループで行動したり、おとなしく待ったりすることが苦手などのさまざまな症状によって、誤った理解をされることがあることも事実です。

こうした誤った理解を解き、正しい認識を広めていくために活動しているグループがあります。グループの名前は、「こころはなまる」です。発達障害などの子どもを持つ保護者らが自主的に運営し、市の市民協働事業に参画しています。

今回は、「こころはなまる」の代表を務める奥野麻美子さんのお話を通して同会の活動を通じ、発達障害について考えます。

いつでも心はなまるで

発達障害という言葉聞いたことのある人は少なくありません。しかし、その内容までは広く知られていません。発達障害は脳の機能障がい、健常者の発達とされる定型発達と少し違う脳の機能があるということです。発達障害は、自閉症、アスペルガー症候群、その他の広汎性発達障がい、学習障がい、注意欠陥多動性障がいなどを総じていいます。

言葉の遅れ、対人や社会性でコミュニケーションがうまくとれない、不注意、衝動的な行動、読んだり書いたりする能力が極端に苦手などの症状が代表的ですが、複数の障がい重なって現われたり、その程度も重いものから軽いものまであります。年齢や生活環境などによっても症状は異なり、「変わった人」「困った人」と誤解され、敬遠されることも少なく

ないと厚生労働省は解説しています。

発達障害と診断されたお子さんを持つ奥野さんが「こころはなまる」を設立したのは、「こじか教室」を卒業した後も療育が必要だと思ったことがきっかけでした。こじか教室は、「育ちにくさ」をもつ子どもたちがその子らしく、すこやかに育っていきけるよう、市が設置する就学前の療育教室です。

「同じ立場の保護者もきつと不安に感じていると思っていました。そこで何人かのお母さん方と一緒に、市に専門部署をつくってもらおう活動をしよう、ということになったのが「こころはなまる」の始まりです。

今年で8年目を迎え、初めは数人の集まりでしたが、会員も30人位にまでなりました。市長に実情や要望を聞いていただく機会もできましたし、市役所内に発達支援室から発達

何を基準に

障がいとしているのか

発達障害では、症状などを「特性」と表現されることが多くあります。奥野さんも、そう思いたい、と言います。

「何を基準に障がいとしているのか、

支援課へと支援体制を強化していただけてきました。行政だけでなく、いろいろな皆さんに力をいただいていることに感謝しています」

「私たちは、子どもも保護者も、いつでも心はなまるの関係でいることを願って会の名前を決めました。そして、一人でも多くの人に障がいを理解してもらおうことを基本に活動しています。

表面的に分かりにくい発達障害を他人に説明するには、何よりも親が正しく理解していなければなりません。その上で、理解が得られるのです。理解の一步を大切にしています。その一步によって明るい未来が開けていくのだと信じています。一人の労力よりもグループで活動して、できるだけ多くの皆さんに発達障害を理解してもらいたいと思っています」と語る奥野さん。

ということですが、私は、子どもがそういう状態で生まれてきたから障がい児だということではないと思います。環境がその子に合っていないだけだと思います。そういう意味でも「特性」



▲「親が老いていなくなってもサポートできる体制をつくるのが私たちの目標です。障がい者にとって優しい地域づくりは、高齢者も含めて、全ての人が暮らしやすい地域につながりますから」と話す奥野さん